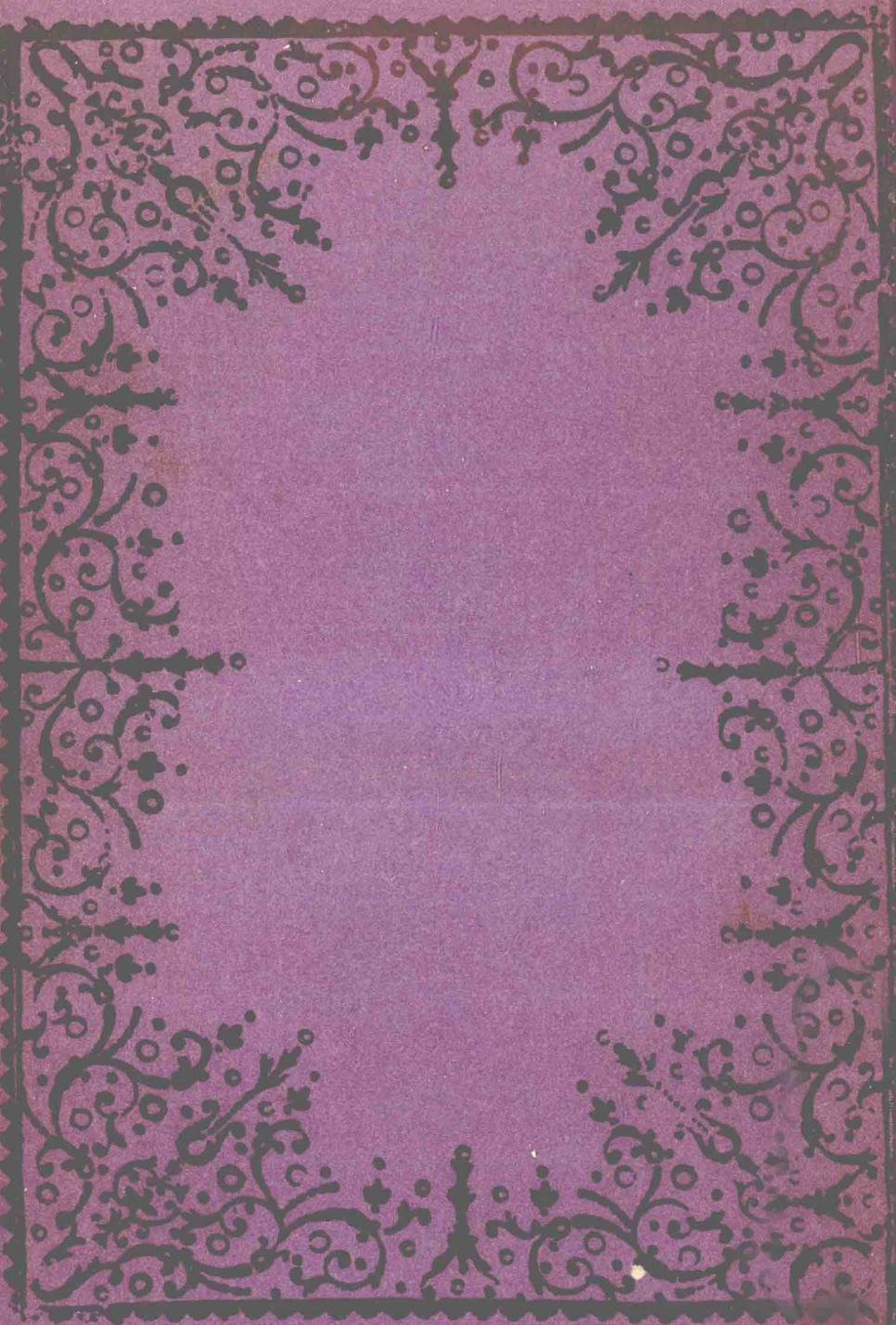




幻視街 半村良



講談社

幻視街

第1刷 昭和52年4月16日発行・第2刷 昭和52年5月30日発行

著者 半村 良 (はんむら・りょう)

発行所 株式会社 講談社・発行者 野間省一

〒112 東京都文京区音羽2-112-21

電話 東京(03)945-1111 (大代表)・振替 東京8-3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

© 1977 RYO HANMURA Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

(文2)

850

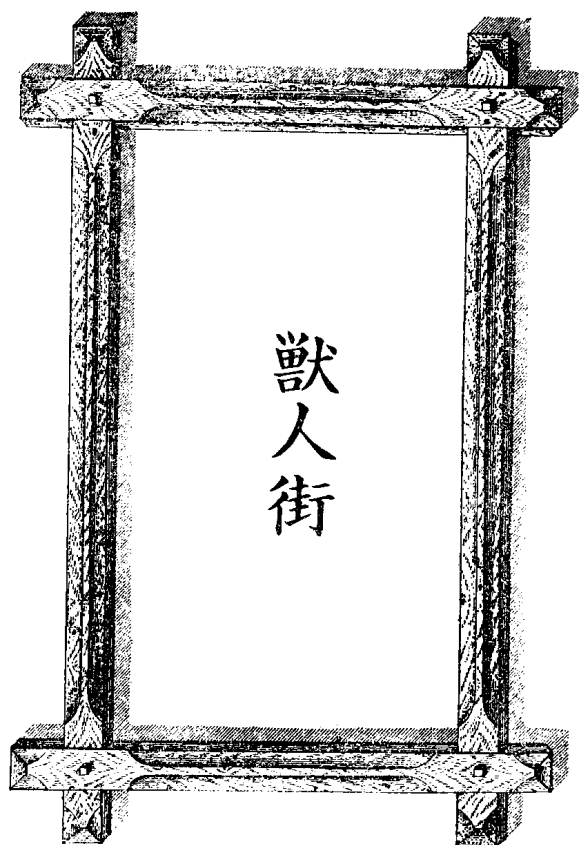
目次

獸人街	6
巨根街	94
夢中犯	145
顔	160
無縁の人	169
失われた水曜日	179
他人の掟	187

幻視人	198
衝動買い	204
黙って坐れば	212
蒸発	218
黒の収集車	227
ボール箱	238
赤い斜線	251

幻視街

装幀 井上正篤



第1章

1

海が荒れている。

海岸ぞいにうねうねと曲りくねった道路が続き、その道路を支える石垣の下は岩だらけの磯だ。磯は或る場所では百メートル程も海のほうへふくれあがるかと思えば、道路のまちかまで後退している所もある。風いだ日には鮑や榮螺がたくさん採れそうな地形だが、今はその岩たちは押し寄せる大波を砕くのに必死になっているように見える。

砕かれた大波は、白い飛沫を風に乗せ思いがけぬ所まで汐水で濡らす。その砕ける時の恐ろしい音と、波が引く時に慌だしく岩場から連れ戻る海水の音に負けまいと、山の樹々が精一杯風に吠えている。磯の反対側はどこも切り立った崖で、ここにも到る所に岩塊が見え、ほんのひとゆすりですぐにも崩れ落ちて来そうな気にさせる。

空の色は冷たい。

黒くはないが底知れぬ厚味を持った灰色である。低い雲でびつしりと掩ってあるのだろう。強風にもかかわらず、その厚い雲は動いている様子もない。山の樹々も道ばたの草の色も、緑というには暗すぎる。昼嵐の色と言おうか。

不吉と言うのはまだ不幸が来てはいないことだが、この景色は不幸そのものだ。不吉さはきのうか

おとといあたりに、すでにこのあたりから去つたに違いない。氣象台もこの悪天候を予測しかねたらしい。何の先触れもなくきのうの午後から突然荒れはじめ、人々を小さな家にとじこめてしまった。道路は到る所で荒波をかぶり、車の通行はおろか、すべての交通を拒否してしまつてゐる。海に落ち込む山の下にへばりつき、磯づたいにうねうねと行くひよわな道は、もう息もたえだえて、人々は山の上の古い土の細道を通つて、辛うじて用を足しているらしい。

それにしても、波というもののほど執拗なものはあるまい。どの一回でも力を弱めるといふことなく、かと言って特に氣張る回もなく、寄せては退き、退いては寄せ、その幾億兆の繰り返しの中で岩を削ろうとしているのだ。

風ぎ晴れた日の午後、その岩磯の窪みに溜つた水の中で、生ぬるい時間をたのしんでいたあの小魚どもは、この荒れた海のどこに身を寄せているのだろうか。蟹は、やどかりは……。

とどろく海と空の音の中に人影はまったくない。どこかの村の漁師が海に出たまままだ帰らないという噂が、風に乗つたように沿岸の村々に拡まつているが、それも狭い部屋の中のひそひそばなしに過ぎず、海と空が喚き散らす中では、まるで取るに足りないことのようにである。

多分その漁師はとうに溺れ死んでしまつたに違いない。いや、今のことから、漁船が沖へ出るとなれば、その乗組員は一人ではあるまい。この荒れた海の中では、どんなに遅しかろうと、溺れ死ぬにきまつてゐる。今ごろはどこかの磯に打ち寄せられ、柔かい肉がとがつた岩に噛まれてズタズタに切り裂かれてゐることだろう。

いずれにしても、これ程荒れた海には死の匂いが強い。母なる海が、送り出した命をひとつでも多く回収しようとしているようだ。

そしてその死の匂いがたちこめる海の中で、彼が揺れていた。彼は波に押しあげられ、また波と共に沈んで、しだいに岸に近寄つて来ていた。彼は波のうねりの中で半ば眠つており、ほとんど体を動

かさなかつた。

半睡の状態で、彼は厚い灰色の空を見ていた。おのれが揺れているとは思わず、酔いすぎた時のように、天井が動いているように感じていた。彼はうねりに体をまかせ、あおむけに浮いていた。身動きもせずに浮いていられるのは不思議なことだったが、彼はそれには気付かずになっていた。

彼の意識の中で、徐々に醒めはじめた部分があった。その部分は、知恵の部分よりずっと奥深く、彼の命の根源に近いようであった。何かがその部分に触れ、醒めよ、と命じているのだ。

——岸が近い——

突然彼はそう感じた。すると体が急に水の中に沈み、息苦しくなった。彼は両手両足を激しく動かして水を掻き、浮き上った。

肺が湿った息を吐き出し、汐風を吸い込んだ。彼は岸に正しく顔を向け、ゆっくりとうねりに乗って泳ぎはじめた。波の頂きに乗るたび陸が見えた。いや、大きな岩の塊^{かたまり}を見たと言ったほうが正しかろう。水も空も同じ色で、その陸だけが黒ずんでいた。

——岩に気を付けねば——

彼はそう思った。岸の様子をまったく知らないのに、そんな警戒心を持つとは奇妙だが、それさえもまだ彼に感じるゆとりはなかった。

——岩が近い——

そう思ったとたん、彼は白い波頭を見た。そして彼を寄せた波が、今見た波のように白くなりはじめた。

彼は水の中で腰を落し、両手を斜め下方に突き出して、岩を探る構え^{かま}を取った。海が彼を押し、陸に寄せようとしていた。いつ手が岩に触れ、どうやってそれにとりついたか、夢中の彼にはよく判らなかつたが、乗っていた波をやりすごした時、彼はかすり傷ひとつ負わず、岩の上に這いつくばって

いた。その体を、退く波が逆に洗って行った。

2

次の波が彼の背後から襲った。一瞬彼の姿はその波に隠れ、すぐにしっかりと岩にへばりついて波にさらわれまいとしている姿が現われた。彼はその波が退きかけると、立ちあがってよろよろと道路を支える石垣のほうへのがれはじめた。次の波が打ち寄せるまでにそう時間のゆとりはなく、石垣へたどりつくまでにあと二回ほど彼は烈しく碎ける波に打たれた。

だが彼は結局石垣へたどりつき、そこでひと息入れた。道路へあがるには石垣が垂直であつた。彼は石垣に手を当て、横這いに右へ移動して行った。その先に岩の盛りあがつた場所があり、彼は波をかぶりながらその岩に這いあがると、やっと道路の上に出た。しかしその道路とて波をかぶっており、うっかりするともう一度海へさらい込まれかねなかつた。

海の息づかいのような規則的な波のリズムの合い間を利用して、彼は比較的安全な山側へ移り、しばらくそこにじっとうずくまっていた。

彼はその荒海からたつた今生まれ出たように見えた。たくましい体つきだったが、その体をかくすものは何ひとつ身につけていなかった。それに彼は疲れ切っているように見えた。波に叩かれずとも足もとはおぼつかかなげで、やがて立ちあがつて歩きはじめても、ヨロヨロとしていた。

彼は山側の崖にへばりつくようにして、蹠蹠そくそくとその場を去った。とは言え、自分がどの方向へ行くべきか知っていたとも思えない。ただ、最初に体の重心が傾いた方へ、はずみで歩きはじめたに過ぎないらしい。

日は暮れはじめていた。

いつもなら、まだ陽の光が残っている時刻の筈だが、この荒天では暮れるのも早い。彼は人けのな

い道をよろめきながら進んで行った。

しばらく行くとごく小さな川が海へそそぎ込んでいる場所があった。その川は道路の下に埋め込まれた土管を通して磯へ流れ込んでいるらしく、橋らしいものは見当らなかったが、道路からその小川ぞいに山側へ入り込む小径こみちがついていた。

彼は道をそれ、その小径へ入って行った。その部分では崖が道路から少し離れ、左側は小さな池のようになっていた。小径はすぐ急な登り坂になり、少し登ると石段になっていた。石段のはじまる所の木の繁みの中に、小型のライトバンが一台、汐風しよかぜを避けるように停めてあった。

全裸の彼はその石段を這うように登って行った。石段は途中で大きく右へ曲っていて、その先は崖の内側にうまく隠れていた。

石段がおわると小さな家が見えた。農家のようなのである。家の中から灯りが洩もれていた。庭先に放し飼いにされている数羽の鶏が、突然闖入ちんにゅうして来た男に驚いてけたたましい啼声なきごえをあげて四方に逃げ散った。

彼の足がその家の戸口へ向って早くなった。早くなったと言うより、マラソンのランナーがゴールへ向って姿勢を崩し、倒れ込んで行くのに似ていた。

彼は左肩からその家の戸口へぶつかって行った。それがノックのかわりのようであった。板戸は大きな音をたて、すぐ家人が気付いたようであった。

「誰や……」

内側から男の声がした。彼は答えず、肩で息をして戸に寄りかかっていた。その戸が内側から引きあけられると、はすみで彼は家の中へ倒れ込んで行った。戸をあけた男がその体を抱きとめる形になった。

「お……」

異常な事態に男は驚きの声をあげた。そこは入口の土間で、茶の間らしいとつぎの部屋から、中年の小柄な女と、中学生くらいの男の子が顔を突き出して見ていた。

「真っ裸やが」

中学生が叫んだ。彼を抱きとめた男は土間の中へ彼を引きずり入れた。

「冷え切っとる」

引きずりながら男が言った。この家のあるじだろう。

「誰やろ」

小柄な中年女が言った。女房らしい。

「風呂は昨夜のままやろ」

亭主はテキパキと言った。

「ハイ」

「すぐに沸かせ。早う暖めてやらにや」

女房はあわてて土間へおりると、風呂のある裏手へ走った。

「そこらに乾いたタオルがあるやろ」

亭主は息子に言った。息子は奥へ駆け込み、古びたタオルを何本か持って来た。その間に亭主は男を土間に坐らせ、息子からタオルを受取ると体中を拭いてやりはじめた。水を拭うと言うより、乾布摩擦をしてやっているようだ。

「服も着とらんと……」

息子が呆れたように言うのと、亭主は叱りつけるように言った。

「浜へ降りて見い。一人だけやないかも知れん」

「うん」

息子は長靴をはき、ビニールのレインコートを着た。

「よう見るのやぞ。荒天しげをくらった船が流れついとるのかも知れんさかい」

息子は返事もせずに飛び出して行った。

「おい……」

亭主は大声で女房を呼んだ。

「何なんやね」

裏から女房が顔をのぞかせて言う。男が全裸なので遠慮しているらしい。

「浴衣の古いがでも持って来いま」

「あ、そうやね」

女房は家の中へあがり、すぐ亭主の古い浴衣を持って来た。

「沈んだ船の衆しやろか」

「そうやろ」

「運の強い人やねえ」

「まったく。こんな荒天しげになあ」

亭主は落着きを取り戻したようだ。

「怪我もしとらんようやね」

「うん」

亭主は男に浴衣を着せおわると、小さくかけ声をかけて抱きあげ、茶の間へ運んで行った。

「しばらくここに寝せておこう」

女房は心得て奥から毛布を持って来て男に掛かけてやった。

「運がいいと言うか丈夫な男と言うか……」

亭主は苦笑しながら女房に言った。

「何なんでもないのがけ……」

「疲れとるだけや。気が付いたら熱いかゆでも食わせて風呂に入れば元氣になるやろ」

女房は感心したように首を振った。

「知らせてやらにやねえ」

亭主に同意を求めるように言う。

「どこへ……」

亭主はとがめるように言った。女房は返事につまり、

「そうやね。気がついてからでも遅うないわね」

と微笑した。

息子が息を切らせて戻って来る。

「何なんも見えんわ」

「船ふねもか」

「ハイ。船ふねも人も、何なんも見えん」

「俺が見て来よう」

亭主はそう言うと言分のゴム長をはき、ゴムの長合羽なががつばを着て外へ出て行った。

この辺りは半農半漁の土地だ。多分亭主は漁業関係者で、山の上に少しばかりの耕地を持っているのだろう。

3

夜になった。

彼はちよつと前に気付き、自分からむっくりと起きあがった。熱いかゆをうまそうに食い、風呂場へ案内されてしばらく湯の音をさせていた。

「どの衆しやろ」

その間にまた女房が言った。気が付いてから、彼はまだひとことも口をきいてはいないのだった。

「そのうち落着けば言うやろ」

亭主は同情するように言い、一家三人はこのあたりに昔から言い伝えられている、海での遭難事件を思い出すままに語り合っていた。

彼が風呂から戻って来た。のっそりと茶の間の隅すに突っ立って、無表情で三人を眺めていた。

「まあそこへ坐らし」

亭主がすすめた。

「酒でもどうやね。一杯やったら元氣もつくやろう」

彼は首を横に振りながら坐った。

「ほう、飲のまんがかね」

彼は頷うなずく。

「どこの衆しやね。だいぶ流されたのやろうが」

彼は首を傾げる。

亭主はその様子を見て、ふと眉をひそめ、女房を見た。

「あんた、喋しゃべれんがと違うやろな」

彼は黙っている。女房が茶をいれてテーブルの上へ置くと、無造作にとりあげて飲みはじめた。

「あんたの名は何と言うのやね」

彼は茶碗を置いて大きく息をついた。